

【日時】令和2年10月28日 10:30—

【集合】根岸線「本郷台駅」改札前

【予定】本郷台駅 → 小菅ヶ谷石仏 → 広地稲荷石仏 → 力石 → 延命地藏・道標（いたち川新橋）
→ 笠間起立社遥拝所 → 今泉不動道標 → 仲宿庚申塔 → 青木神社二十三夜塔 → 大船駅



① 本郷台駅



JR 東日本の根岸線の駅であり、隣の港南台駅と共に昭和48年(1973)に開業しました。令和元年度(2019)の1日の乗車員数は約18,500人で、駅周辺一帯は、戦前に第一海軍燃料廠であった場所です。海軍で使用する燃料・潤滑油等、石油関係の研究・実験を行う施設として昭和13年(1938)に建設されました。この地は、横須賀港や厚木飛行場にも近く、軍事国道として原宿六ツ浦線なども整備されました。代替燃料として松根油の確保のため周辺の住民を動員して松の木の大規模な伐採が行われたようです。なお、大船駅から本燃料廠まで引き込み線が引かれていました。

戦後は駐留軍に接収され、「大船PX」(PACEX: 倉庫地区)となり、昭和40年(1965)に接収解除により変換され、栄区役所、本郷中学校、栄共済病院などの施設や住宅用地、警察学校などに転用されました。

② 本郷の由来



「この地域は旧鎌倉郡本郷村であるが本郷の名は鎌倉時代末期の文書に山内庄本郷とあるのが最古である。しかし本郷とは律令の条里制の里、即ち郷の中心の異であり、弥生・古墳時代を通じて早くから水田耕作が行われ、人口も集中した所で、奈良朝の名称である。本郷は倭名抄の鎌倉郡七郷中の尺度郷の中心地とみられ、班田収受法の公田が公田町、口分田即ちツボが小菅ヶ谷町中ノ坪、上郷町柳ノ坪等の地名として現存し、七石山古墳群をはじめ、七八世紀の横穴古墳群が数多くあることによって理解できる。尺度郷は天平七年の正倉院文書、相模国封戸租交易帳に、五十戸、田二百二十五町八段二十七歩

とあり、相模国の一郷平均田数を四十八町も上回る富裕な穀倉地帯で、本郷の名はこの尺度本郷に由来する。平安以後は山内本郷と呼称され、鎌倉時代以後この地の総称となった。」

本郷は、横浜市南端に位置して栄区に属し、昭和 61 年(1986)11 月戸塚区から分区して、泉区とともに誕生しました。昔は鎌倉郡に属し、上之（現在の上新郷）、中ノ（現在の中野）、鍛冶ヶ谷、公田、小菅ヶ谷、笠間の六カ村で構成されていました。

③ 小菅ヶ谷石仏 双体道祖神、月待塔



天保九年(1838)建造の双体道祖神で、小菅ヶ谷には双体道祖神(縦の短い四角柱に男女二体の神体を刻んでいる)があります。道祖神は路傍の守(道の神とも言われる)であり、村の境や道の辻、三叉路などに石碑や石造などを祀られており、村の守り神、子孫繁栄、旅の安全祈願の守として信仰されています。男神を少し大きめに、女神は掌中で手を合わせている掌中拱手型になっていて典型的な相模型の道祖神です。小菅ヶ谷では、中世からの鎌倉道の分岐点や曲がり角などに祀られています。鎌倉道が小菅ヶ谷を通っていたということがわかります。

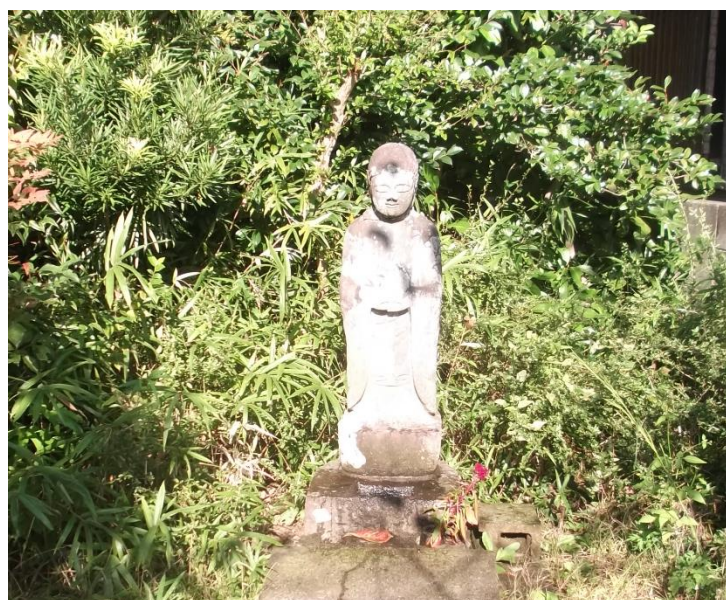
また、月待信仰の中の二十三夜講によって造立された二十三夜塔も祀られています。月待信仰は、定められた晩に集まり月が昇るまで集会を持つ講中の信仰で、十三夜から二十六夜まであって、それぞれお祀りする対象が決まっています。二十三夜講の主尊は勢至菩薩です。

④ 小菅ヶ谷・根岸線脇石仏 延命地藏



和田の地蔵石仏(文化十二年 1815 年)に建てられ、右手に錫杖、左手に宝珠を持っている延命寺蔵です。衣の裾がはためいて、救いを求めている人の所へ急ぐ地蔵の姿を表現しています。延命地蔵は、新しく生まれた子を守り、その寿命を延ばすことを誓願するお地蔵様のことです。サンスクリット語では「クシティガルバ」と言われ、「クシティ」は大地、「ガルバ」は「胎内」「子宮」の意味です。日本の民間信仰では道祖神としての性格も持ち、「子供の守り神」として信じられています。

⑤ 広地（こうち）稲荷前石仏（庚申塔、双体道祖神）



青面金剛庚申塔は明和元年(1764)に、文字塔は万延元年(1860)に建造され、さらに地藏石仏、文字の馬頭観音塔があります。階段を上って稲荷の境内の双体道祖神塔は慶応三年(1867)に造立されたものです。なお、この稲荷社はこの辺りの谷戸の集落の共同の稲荷であり、その脇の道を奥に入ると丸彫りの薬師如来像があり、薬壺（やっこ、くすりつぼ）を奉持しています。

⑥ 西本郷小学校前の力石（ちからいし）



この石は重さが 30 貫(112.5 k g)あって江戸時代の末期（1860 年）に若者たちの力比べに使われていました。江戸時代の始めに、本郷に左近、鎌倉の関谷に右近という 2 人の力持ちがいて、お祭りのたびに大きな力石をもって争い観客をにぎわせたそうです。明治の初めには、小菅ヶ谷村出身の東京相撲の力士・春日森関取りは、この力石を軽々と持ち上げ手玉に取ったそうです。その後、明治の中頃には小菅ヶ谷村の住人で茅葺屋根の上に担ぎ上げたとか、明治の終わりごろまで小菅ヶ谷村でこの力石を担ぎ上げる 5、6 人の若者たちがいましたがその後はいないとのことでした。

⑦ 道標と延命地蔵（いたち川 新橋（にいはし））



尖塔角柱形の道標には元禄 四年（1691）の刻銘があります。鎌倉古道を示すこの道標には、「従是 とつかミ道」「従是 ぐみやうじ道」と書いてあり、この先にも小菅ヶ谷の追い上げ坂下、花立、舞岡公園の手前にも道標があります。この先が、戸塚、大船、北鎌倉、上大岡、六浦に抜ける笠間十字路になります。お堂にあるお地蔵さまは、小菅ヶ谷と笠間の村境を示す延命地蔵尊です。

⑧ 水神祠（いたち川 水神橋）



この辺りは、いたち川の湿地帯であり、胸までつかるほどの深い泥田でした。大雨の時はいたち川上流水域の洪水を避けるため堰が決壊しないように堰板を外したりする際に濁流の中に入る必要があり、堰を管理する人が何人も亡くなったと言われています。このような犠牲者の霊を弔うため及び水神の怒りを慰めるため、大正九年九月（1920）に造立されたものです。

⑨ 起立社 遥拝所



幕末から明治にかけて、社会不安を修めるため笠間周辺には修験者たちが中心となって、富士山や御岳山をご神体とする山岳信仰が盛んでした。笠間や上郷には先達（せんだつ）と呼ばれるリーダーが現れて、起立社では御岳信仰が民衆の心を信仰に向けさせ、既成宗教や寺社が救済の力を失っていく中で、御岳講を結成して、講碑や霊神碑を造立して村の崩壊を防ぎました。

御嶽信仰は、岐阜県と長野県の県境の木曽の御岳山を富士山に次ぐ標高 3067m の霊峰として仰ぎ、頂上に鎮座する御岳山神社は、国常立命（くにとこたちのみこと）、大己貴命（おおなむちのみこと）、少彦名命（すくなひこのみこと）を御祭神として、五穀豊穰、子宝・縁結びを祈願し、長寿を護り、病難を癒すとされています。さらに、遥拝所の奥にある清滝不動三尊石仏は、御岳山の里宮の近くにある滝行の場所に設置されている不動明王を模したものであり、さらに二童子像（矜羯羅童子（こんがらどうじ）と制吒迦童子（せいたかどうじ））を両脇に従えています。

⑩ 今泉不動（鎌倉稱名寺）への道標



この道標は不動明王の石仏で、台座には今泉村、宝永七年（1710）、鎌倉大町講中と刻まれています。この道標は今泉不動（鎌倉稱名寺：浄土宗で空海（弘法大師）の開山で本尊は阿弥陀如来）への道しるべであり、鎌倉市岩瀬を通して今泉に抜ける道を示します。

不動明王は、大日如来の化身とも言われ、五大明王の中心となる明王でもあります。真言宗をはじめ、天台宗、禅宗、日蓮宗等の日本仏教の諸派および修験道で幅広く信仰されています。大日如来、降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王、金剛愛染明王らと共に祀られます。不動明王は一面二臂で降魔の三鉗剣（魔を退散させると同時に人々の煩惱や因縁を断ち切る）と絹索（けんさく/けんじゃく。悪を縛り上げ、また煩惱から抜け出せない人々を縛り吊り上げてでも救い出すための投げ縄のようなもの）を持っています。剣は竜（俱利伽羅竜）が巻き付いている場合もあり、この事から「俱利伽羅剣」と呼ばれています。その身体は基本的に醜い青黒い色で表現される像容が多く、頂は七髻か八葉蓮華、衣は赤土色、右牙を上に出し左牙を外側に出す、というのが一般的とされます。

⑪ 御蔵坂（おくらさか）の五輪塔と板碑



江戸時代に笠間村の年貢米を一時的に保管する蔵が

この近くにありました。昔はやぐらがあり、板碑数基と五輪塔がその中に収められていましたが、現在は、五輪塔3基と板碑3基の一部だけになり、五輪塔のうち2基の最下部が水輪となっています。五輪塔は和型墓石の一つで、平安時代後期に真言宗の覚鑿（かくばん）上人が最初に作ったと言われており、当時から身分の上下に関係なく建てられ、五輪塔を建てると故人は極楽浄土へいけると言われています。五輪塔には「空・風・火・水・土」という意味があり、下から四角（六面体）・丸（球）・三角（四角錐または三角錐）・半丸（半球）・上の尖った丸（宝珠型）または尖っていない団子型（団形）を積み上げた形に作られます。

⑫ 笠間庚申塔（仲宿 鎌倉中の道）



仲宿は、笠間を通過して鎌倉へ至る道（鎌倉三道の中と下の道と異なり、北条早雲の時代に新たに開かれた鎌倉道）で、笠間のほぼ中心に当たります。この仲宿に、庚申塔が4基、地蔵菩薩像が1基経っています。一番背の高い駒形の阿弥陀庚申塔は延宝八年（1680）に造立され、台座に腰掛けるように三猿（見ざる、聞かざる、言わざる）が彫られ、上部に刻まれた日と月は雲の上に載っており、「日月清明」つまり

天候が温順で作物がよう実るようにとの願いが込められています。天候不順は、干害、冷害、洪水を引き起こすので、庚申塔にこの日月を刻むことにより「作神（農耕の神）」の性格が表れています。青面金剛庚申塔は正徳四年（1714）、文字庚申塔は万延元年（1860）に造立されたもので、鎌倉との境の十字路にあったものが移設されたようです。供養地藏石仏は、円光背で合唱型のお地藏様ですが、下半身は残念ながら折れています。

⑬ 青木神社二十三夜塔



笠間町（旧笠間村）の鎮守であり、御祭神は天手力男命（あめのたじからおのみこと）、天照大御神（あまてらすおおみかみ）、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、伊弉冉尊（いざなみのみこと）です。社伝によれば、建武2年（1335）に近藤出羽次郎清秀が領内笠間村の高所（現在の社地）に神社を建立し、近藤一族と領内鎮護の社としたと言われており、新編相模風土記には「青木明神社村の鎮守、村持」と記されています。近藤出羽次郎清秀は、新田義貞軍に加わった関東武士団の一族ではないかと言われていす。

境内には二十三夜塔があり、万延元年（1860）に建立されたものです。月待供養に建てられたもので、定められた晩に「講中」の仲間が集まり、月が昇るまで食事を共にして経などを唱えて月を拝み、悪霊を追払う行事です。なお、本郷にある月待講は、ほとんどが二十三夜塔（主尊は、仏教系は勢至菩薩、神道系は月読命（つきよみのみこと））です。

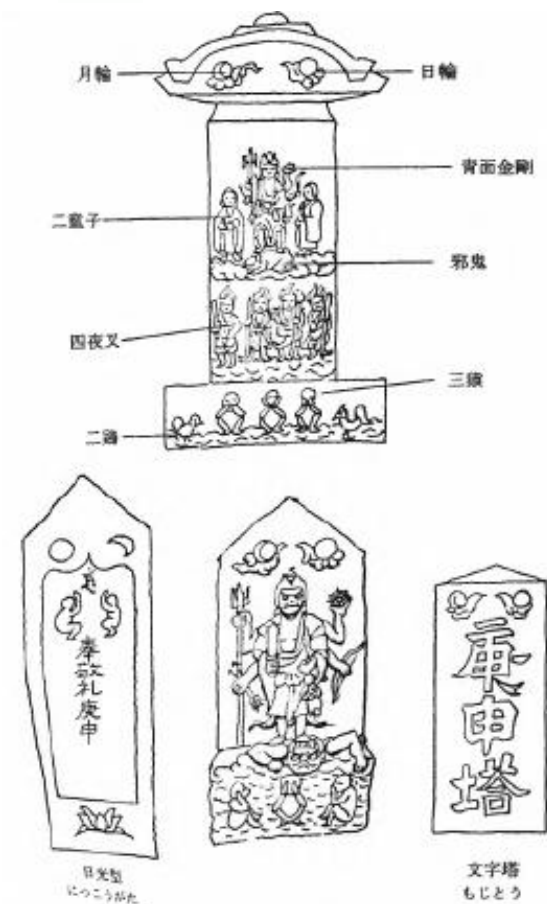
参考文献

- [1] 本郷郷土史研究会：{本郷の石仏散歩} 本郷郷土史研究会（昭和 59 年 3 月）
- [2] 栄区役所地域振興課：「栄区郷土史」 横浜市栄区地域振興課（平成 27 年 3 月）
- [3] 栄の歴史編集委員会：「栄の歴史」 横浜市栄区地域振興課（平成 25 年 3 月）
- [4] 日本石仏協会編：「石仏探訪ハンドブック」 青娥書房（2011 年 4 月）
- [5] 外山晴彦：「野仏の見方」 小学館（2003 年 6 月）
- [6] 青木神社 <http://aokijinjya.jp/about>

1) 石造物の種類

	石造物	読み方	文字	彫像	備考
1	庚申塔	こうしんとう	「庚申」、「猿田彦」、「青面金剛」	三猿	一猿、二猿も庚申塔の可能性あり
2	月待塔	つきまちとう	「十三夜」～「二十六夜」「勢至」		念仏講碑、富士講碑とは異なる
3	念仏講碑	ねんぶつこうひ	「七夜」「四十八夜」		恵比寿と並ぶ大黒天は甲子塔とは別
4	富士講碑	ふじこうひ	「二十六夜同行」「丸藤高田十三夜講」		
5	甲子塔	ぎのえねとう	「甲子」「大黒天」「子待ち」		
6	巳待塔	みまちとう	「己巳」「巳待」「弁財天」		水神との区別
7	道祖神塔	どうそじん	「道祖神」「塞の神」「岐の神」「賽の神」		彫像だけでは判断が難しいこともある
8	馬頭観音	ばとうかんのん	「馬頭観音」	宝冠に馬頭	三面八臂が多いが、一面二臂、四面二臂などもある
9	金精神	こんせいじん		男根型	女院や丸石を伴うことが多い
10	地藏	じぞう	「地藏」	円頂(坊主頭)	錫杖を持つ姿が多い
11	水神	すいじん	「弁財天」「弁才天」「水神」「水天」		水路、池、泉、井戸などの水辺に設置される
12	巡拝塔	じゅんぱいとう	「三十三番」「百番」「百八十八番」		如来や菩薩像を伴うものもある
13	六十六部	ろくじゅうろくぶ	「六十六部」「廻国」「大乘妙典」		地藏、如来や菩薩像を伴うものもある
14	板碑	いたび	種子(梵字)	山形・二条線	緑泥片岩の一枚岩が圧倒的に多い
15	山の神	やまのかみ	「山神」		文字塔以外は、判定が難しい
16	羅漢	らかん		老僧形	十六羅漢、五百羅漢が多い
17	不動明王	ふどうみょうおう		後背に火焰	右手に剣、左手に羂索を持つ

2) 庚申塔



庚申塔は中国から伝来した道教に基づいて建てられた石塔で、庚申講を3年18回続けた記念に建立されることが多いようです。塚の上に石塔を建てることから庚申塚、塔の建立に際して供て供養を伴ったことから庚申供養塔とも呼ばれています。庚申講（庚申待ち）とは、人間の体内にいる三尸虫（さんしちゅう）という虫が、庚申の日の夜寝ている間に天帝にその人間の悪事を報告しに行くと言われていたことから、それを避けるためとして庚申の日の夜は夜通し眠らないで天帝や猿田彦や青面金剛を祀り、勤行をしたり宴会をしたりする風習のことです。庚申塔の石形や彫られる仏像、神像、文字などはさまざまですが、申は干支で猿に例えられるから、「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿を彫り、村の名前や庚申講員の氏名を記したものが一般的です。仏教では、庚申の本尊は青面金剛とされるため、青面金剛が彫られることもあります。神道では猿田彦神とされ、猿田彦神が彫られることもあります。また、街道沿いや村落の出入り口に置かれ、塔に道標を彫り付けられた庚申塔もあります。

3) 月待塔

	月待信仰	主尊
1	十三夜塔	虚空蔵菩薩
2	十五夜塔	阿弥陀如来、薬師如来、大日如来、聖観音
3	十六夜塔	阿弥陀如来、大日如来、聖観音
4	十七夜塔	聖観音、如意輪観音、勢至菩薩
5	十八夜塔	馬頭観音、地藏菩薩
6	十九夜塔	如意輪観音
7	二十夜塔	阿弥陀如来、聖観音、如意輪観音
8	二十一夜塔	如意輪観音
9	二十二夜塔	如意輪観音
10	二十三夜塔	勢至菩薩、月読尊
11	二十六夜塔	愛染明王、阿弥陀三尊

民間信仰の一つで、特定の月齢の夜に集まり、飲食を共にしたあと、経などを唱えて月を拝み、悪霊を追い払って月待行事を行った講中のことで、供養の記念として造立した塔のことです。室町時代から文献等で確認され、江戸時代の文化・文政のころ全国的に流行したようです。特に普及したのが二十三夜に集まる二十三夜行事で、二十三夜講に集まった人々の建てた二十三夜塔は全国の路傍などに広くみられ、栄区ではすべてこの二十三夜塔です。

4) 仏の一覧

如来：悟りに達した仏陀（釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来、大日如来、無量寿如来など）

菩薩：悟りをめざして修行する（文殊菩薩、普賢菩薩、地藏菩薩、弥勒菩薩、日光菩薩、月光菩薩など）



観音：苦しむ人を観て救済する（聖観音、千手観音、十一面観音、如意輪観音、馬頭観音など）

地藏：大地のような大きな慈悲の心で人々を救う（子安地藏、延命地藏、いぼ地藏など）

明王：如来に従わぬ衆生を救う 忿怒相（不動明王、愛染明王、金剛夜叉明王など）

